リステラス星圏史略
古資料ﾌｧｲﾙ　5-2-1-4
『 Never Ending Streets 』

（発掘整理一旦完了）

霧樹里守 is 土岐真扉

目次

【　移転　の　お知らせ　】 1
『　ありえる・たうん　第四話・1　』　（@ 96.08.24） 2
『　ありえる・たうん　第四話・2　』　（@ 96.08.24） 9
『　ありえる・たうん　第四話・3　』　（@ 96.08.24） 11
『　ありえる・たうん　第四話・4　』　（@ 96.08.24） 16
『　ありえる・たうん　第四話・5　』　（@ 96.08.24） 21
『　ありえる・たうん　第四話・6　』　（@ 96.08.24） 27
『　ありえる・たうん　第四話・7　』　（@ 96.08.24） 35

奥付

奥付 43

【　移転　の　お知らせ　】

☆
☆　超～大幅に！　　加筆＆改稿した２０２３年版、
☆
☆　こちらに移転しました。
☆
☆
☆　　『 善 野 物 語 』
☆
☆　　. . . おおの・ものがたり. . .
☆
☆
☆　　https://novelpia.jp/novel/3718
☆
☆
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

（発掘作業中）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『　ありえる・たうん　第四話・1　』　（@ 96.08.24）

http://76519.diarynote.jp/200609141035550000/

2006 年 9 月 9 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3

☆ ありえる・たうん 第四話 ☆

〜ネバーエンディング・ストリート〜

. . . そして、はてしのない道程. . .

☆

杉谷好一がそいつに出会ったのは入学式から三日目のことだった。

うっとうしくて行く気などない学校ごときは朝起きる前から無視してかかり、無免許のバイクでツーリングにでも出かけようかという途上。

いかにも具合いが悪そうに道端でうずくまっている妙な子供を、見つけてしまったのが縁だ。

小柄な日本人にしても中学に上がる年齢には、とても見えない。

痩せて貧相な体に、不似合いな新品の学ランを重たげに身につけて、市立二中への通学路のなかば、敢えなく力つきたという風情で膝をかかえて小さく哭いている。

時刻はすでに二時限目も終わろうかという頃で、まじめに登校する気にしても遅刻の扱いはまぬがれないだろう。

ところどころに金のメッシュが入った濃色のみじかい巻き毛も、純粋な東洋人にはあるまじき状態だが、いわゆる不良化した生徒にしては年も幼いし、規定通りのマトモな制服だ。

.....この狭いまちに、自分らと同じ双血（ハーフ）の子供が、ほかにもいたのか.....と。

バイクを停めたのは好奇心からだった。

『どうした？』

声をかけてしまってから、それが自分にとっては一番自然な、米俗語（スラング）だった事に気づく。

久しぶりに見た黒一色以外の頭のせいで、感覚がずれたのだ。

半年間の慣れない “母国” 暮らしで結構ストレスが溜まっているらしいなと、他人ごとのように苦笑してから、日本語で言い直そうと口を開きかけると。

ココア色の肌の少年が赤く泣きはらした顔で、ぼんやり自分を見上げているのと目があってしまった。

涙滴があふれ落ちている黒茶の瞳が浅い春の青空を映して、あきれるほどに大きい。

泣きやむためにしばらく息を整えたあと、

『ええと.....。ちょっと、気分が悪くて』

驚いたことに小さい子供は流暢な英語で答えてよこした。

米語ではない欧州風の発音（クインズ・イングリッシュ）だが、もちろん会話に不自由はない。

『.....、家まで送ってやろうか？』

がらにもない親身なセリフをつい吐いたのは、久しぶりにあかの他人と会話を交わした解放感のせい。あるいは日本語が不自由なために学校で孤独をかこっているらしい、自分の妹が、登校前に玄関先で鏡をにらんで嘆息している姿と。

泣いている子供の印象を、重ねてしまったからだ。

『え.....』

子供はしばらく考えこんで、手の甲でぐいとばかりに涙を拭うと、弱々しく首をふった。

『学校、行く。.....行きたい...』

『具合が悪いんじゃないのか？』

『神経性の病気だから.....ここで逃げたら、一生、負けだから。』

.....オレのように.....。

「義務教育」など、拒（こば）んでしまえばラクなのに。

言おうとしたセリフがなぜか喉から出なかったのは、ついさきほどまで濡れていたはずの子供の黒い眼が、奥底からの光を取り戻し、きっちり何かを見据えていたからだ。

容姿ではなく意志の強さが、やはり妹に似ているようだと、好一は考える。

年齢も、きっと近いか同じだろう。

「おまえ、日本語は？」

米語をやめて訊ねると、即座に、

「え、話せるよ。俺、育ったの日本（こっち）だもん」と、切り換えて返事をよこした。

見た目はずいぶん貧弱でも、二重言語者（バイ・リンガラー）の常として、頭のつくりは悪くはないようだ。

うまくすれば妹の遊び相手か、日本語の家庭教師の代わりにでも、利用できるか知れない。

「乗れ。……二中の校門でいいな？」

予備のメットを差し出してバイクの後ろを示すと、打算に裏打ちされた申し出とも知らず、痩せた少年は嬉しそうに泣き笑いの表情をつくった。

「ありがとう。俺、磯原清（いそはら・きよし）って言うんだ」

☆

越して来たばかりだという自己紹介に、だからお互いに知らなかったのかと、納得はしたものの。

この市の中では排斥されている自分たち兄妹と、事情を知らないうちに不用意に親しくなってしまっては、転校生には不利な条件となりかねないだろう。

校門の少し手前、校舎の窓からは死角になる辺りをと計算してバイクを停めて、短く告げた。

「ひとつ忠告しとく。俺に送られたなんて事は、喋らないほうがいいぞ」

「え？ －……なんで？」

「仲間だと思われると、おまえも外（はず）される」

どうやら勘は良いらしい子供は、低い声で言われたことの意味を、即座に理解したようだった。

そうでなくとも、そもそもこの時間帯に学校へも行かずに私服姿で、見るからに無免許のバイクを乗り回しているあたり、ちょっと考えればマトモの生徒のやる事ではないし。

.....ほんの、一瞬。

うそはつけないだろう大きな瞳が、“それは困る”と言うように揺らぐのを、好一は、しかし見逃さなかった。

彼自身は一生認めないだろう。その時に自分の胸が少しだけ、しくりと痛んだことなど。

「でもぉ.....。ええと、ねぇー.....」

トモダチ、という単語をぼそぼそ呟いて、迷っているような、短い沈黙がおりる。

「やめておけ。ここに溶け込みたいのなら、俺たちには構うな」

.....なんで、こんな、親切を言う？

ヒトデナシ
自分のことを人非人（ヒトデナシ）だと規定している少年は、自問自答した。

相手が自分の悪評を知らないのなら幸いと、今のうちに恩を売りつけて、手もとに取り込んでしまえばいい。その結果として学校なぞで孤立しようがどうしようが、知ったことではない。

少なくとも今までの、いつもの彼ならば、そうして来たはずだ。

そのとき、ちょうど授業の合間を知らせるチャイムが鳴って、校舎がいっせいにざわめいた。

「あのねぇ……、俺、ガッコ来ようって決めたから、また仲間外れにされるのは、すっごく困るんだけどぉー……」

子供は、ひどく老成したような暗い顔で言葉を探してから、ニッコリ開き直った。

「バレなきゃ、いーわけでしょう？

今度、また遊んでね！」

『送ってくれて、どうも有り難う！』

アメリカ風の発音に換えて相手に合わせた米語でもって、礼のことばを言いおいて。

しかもいきなり抱きついて来て、幼児が大人にするような、頬に柔らかいキスまで送る。

そうしてから清は急いで……しかし走ることは出来ないらしい、ヨタヨタした足どりで……校門のほうへと消え去った。

不覚にも、何も言えずに呆然と、ただ見送っていた好一である。

その後。

担任だという若い教師の再三の家庭訪問に、とうとう根負けをして。

「気が向けば、登校してやってもいい」

ふざけた返事で最大限の譲歩を示した好一は、小さな子供が同じ教室に所属している、一年遅れどうしの自分と同じ歳だと知った。

つきあってるのが世間に知れなきゃ問題ないぞと笑って言いきった、見かけによらない度胸の良さと、根性の悪さと。

やはり馬鹿ではないらしく、お互い学校にいるあいだは、平然と知らないフリを続けたが。

早退と遅刻がやたらに多い虚弱児と、授業時間に平然と遊びまわっている不良生徒が遭遇する確率は、まじめな生徒たちより必然的に高くなり。

路上で潰れているのを見かけては、しかたなく声をかけてやると、相手を好一と見分けるなり、本気で－.....

嬉しそうな顔をする。

杉谷の家にまつわる黒い噂を知らないままなのか、それとも知っても態度が変わらない、けっこう大物なのか。

お互いに、さしたる話をするわけでもなく、疑問の答を知らないままに幾度かの偶然の送り迎えを重ねて。

そうこうするうちに、夏休みを迎えた。

『　ありえる・たうん　第四話・2　』　（@ 96.08.24）

http://76519.diarynote.jp/200609141042440000/

2006 年 9 月 10 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3

☆

出来良たちが警護衆（しめごし）による厳重注意をくらって敗退し、恒例の禁突破（きんやうでぃ）さわぎが一応の決着を見たあと。

見つかったのでこれ以上は続けられなくなったとの四人組からの報告に、うん解ったと大人しく首肯（うな）づいた清は、しかし自分は野者でないから斎除けの処分には関係ないもんねとばかり、こっそり舌を出して。

その後も懲りずに一人きり、内緒で地図や資料の調査を進めていた清がとうとう結論を出した最終目的地は、善野市北辺の山中にあるという小さな神社、〈山殿様〉（やまんまさぁ）だった。

なぜその結論に達したかと言えば、郷土史資料館にも市役所にも図書館にも、そこに関する情報だけが、まったく無かったからだ。

「.....考えたよなぁー.....」

この謎かけをした人物と会える機会がもしあったら、ぜひとも敬意を表したい。

なにしろ善野盆地にゴマンとある他のすべての神社に関しては、建築様式やら祭神やら、縁日のひどりから主だった行事の内容と、色々探せばそれだけいくらでも、資料や記述や季節ごとの風景写真でさえ、ごろごろ出て来るのである。

しかも如何（いか）にも思わせぶりに、ここにこそ一番の秘密はあるぞと、ほのめかすような感じで。

かたっぱしから足で調べて回っていれば、必ず途中で地元の誰かから、見咎（とが）められるに違いない。

二番目の兄から譲り受けたノートパソコンのお古を使い、しらみ潰しにデータを入力し尽くして、夏休みの課題の予定にまで悪い影響を出してしまったという自覚はある清は。

体力がなくて肘かけイスの探検家（アームチェァ・エクスプローラー）（？）に終始したことが逆に幸いしたのかなぁと、苦笑をしてみたりする。

五万分の一地勢図の拡大コピーをこしらえて、目的地の周辺をよくよく解析してみれば、尾根筋こそ入り乱れて複雑な地形になってはいるものの、等高線の間隔は、けっこう緩やかで。

「い、よーしっ！」

まっすぐ歩いて越せない山でもなさそうだなと、初心者なりに周到な、登山計画を練り上げる清である。

しかしもちろん “御神域” と言えば人跡まれな原生林であるという事実を、未熟な子供は甘く見すぎていたのであった.....。

『　ありえる・たうん　第四話・3　』　（@ 96.08.24）

http://76519.diarynote.jp/200609141056220000/

2006 年 9 月 11 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3

☆

善野（おおの）より日の代（ひのしろ）川の流れいでる下端の滝を〈海な口〉（みぃなぐち）、流れこむ上端のそれを山殿様（やまんまさぁ）と呼ぶ。

海な口の滝壷下はそのまま小さな湖沼となって、手漕ぎの和船や茶屋をも備えた遊びの場として市民から親しまれるのに比べ。

日の代川の上流深く、山殿様に近づくあたりは白鳥天宮の御料（ごりょう）の杜（もり）とやら、いまだかつて人の手が加えられたことのない太古のままの森林が、欝蒼と連なるばかりである。

車道も消え、砂利敷きの林道も消え、あとは道とは名ばかりの杣（そま）の踏みわけた細い筋が、木の下闇のほの昏い谷あい峰すじに、途切れ途切れに続いて行くばかり。

先ほどまでは背中を押してくれていた涼しい微風も、気がつけばすっかり絶えていて。

「.....っ。あつ〜ぃい.....」

ため息ついて呟いて、手の甲でアゴをぬぐえばビッタリと汗で濡れ、いっそうに蒸し暑さが増した。

清はここへ来るまで山歩きなど、ほとんどまったくした事がない。

唯一の例外といえば幼稚園のころに家族で登った神奈川県の大山だろうと思うが。

それとて、松葉杖をつく父の半身を母の肩が支え、末っ子が疲れたと泣けば四人いる兄達が代わるがわるに背負ってやりという、実にほのぼのとした行程だったのだから、経験のうちには全く入らない。

（しかも清はその時の事を、ろくに覚えてすらいない。）

野外活動が大の得意の元気な兄たちから、体験談やコツについてはしょっちゅう病院のベッドで耳にしていたものだが、自分でやるのは初めてだった薮漕（やぶこ）ぎの、直登（ちょくとう）コースに挑戦し。

予定に倍する二時間あまりが経過して、つくづく無謀だったと気がついて、後悔した頃には。

全身がクモの巣だらけの草の実だらけ、手にはトゲが刺しカギ裂きがミミズ腫れになり、慣れない軍手の下では指先の豆がそろそろ潰れようかという.....、悲惨な状態で。

しかも頼りにしていた方位磁石が心もとなくグルグルと、首をかしげて途方にくれている。

「〜〜〜、富士の樹海じゃないんだからさぁ〜〜.....っっ」

鉄鋼石の鉱脈等が近くにある場合そうなるのだと、科学的知識の裏付けを、持っていたのは幸いではあるが。

同時に脳裏に浮かんで来るのは『怪奇！ 怨念地縛霊』だの、謎の UFO 誘拐事件だの、

テレビで覚えた恐怖の世界である。

いささかなりとも背のびなどして、視界を広げる方途に努めても、杉や桧（ひのき）のよく似た山並みが四方と言わず十重二十重（とえはたえ)、気怠い熱気にとろりと沈んで、野鳥の声さえ途絶えた昼下がり。

静寂が、ひよわな都会っ子をひたりと潰して、圧殺しようとする重さ。

近隣の最高峰で三千 m 近いという白姫岳の美しい山容も、あいにくの雲にぶあつく隠されていて、昼下がりでまだ高いはずの太陽の位置ですら、さっぱり見当がつかない。

ここのところの曇天つづきを涼しくて良いだろうとばかり、わざわざ選んで出かけて来た作戦が、みごとに裏目に出ていた。

.....このままでは目的地どころか、自転車を乗り捨てて来た麓の道へ戻ることさえ、危ない.....

誰にも行き先を告げずに出て来た自分のウカツさに、遅まきながらに考えいたって背筋をあわ立てる。

最近すっかり丈夫になったと調子に乗ってつけ上がり、足りない己れの体力を、過信し過ぎていたような、ここで発作のひとつも起こせば、冗談ぬきでの遭難かも知れない。

「.....おにぃちゃぁ〜ん.....」

情けなくも呟いてみたところで何の解決も呼びはしないのは、解ってはいるのだが。

とりあえず、すぐ目の前の沢まで降りて、飲み干してしまった水筒の中身を補給しよう

かと、歩き始めた時に。

ざわり。

.....と、すぐそばで葉音が鳴った。

「.....え.....？」

風ひとつなく湿気のこもる蒸し暑い晩夏の原生落葉林。

空気が動いた様子もないのに、なぜに木のかげが揺れるのだろう？

ざわり、ざわり、

.....ざわり。

「た.....、たんまっ」

一角のみを開けた残りの三方から、取って囲むように近づいて来るそれに、清の全身がすくんで凍る。

ひぃひぃひぃ

……

おぅおぅおぅ

……

地を這うような不気味な笑い、重ねるように凶暴な応（いら）えが返る、その余韻が。

消え去るのを待たず、清は本能にかられて走り出していた。

長い闘病生活で、薬物投与に対する抵抗力が極端に落ちている体質だとまでは、〈闇雲〉（みやでぐも）を焚いた警護衆たちにも思いもよらないことだったのである。

尋常ではない悲鳴をあげて、残された全力を尽くして子供は逃げ惑っていった。

『　ありえる・たうん　第四話・4　』　（@ 96.08.24）

http://76519.diarynote.jp/200609141100500000/

2006 年 9 月 12 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3

☆

清と同じくデータベースに集積した情報を再度分析しなおす事で、ほぼおなじ時期に等しい結論にたどりついた杉谷好一は、しかしはるかに恵まれた条件を持っていた。

彼が育ったアメリカといえば青少年向けサマーキャンプの本場で、とりわけ特殊な親の教育方針のおかげで、野外での生存（サバイバル）訓練などは毎年のように受けさせられていたからである。

原生林での知識もあれば、〈謎が辻〉での体験で、ここでは磁石がアテにならないという情報を得てもいる。

こちらは人並み以上に体力にも余裕があって、地図で調べた等高線通りに、遠回りではあるがもっとも確実な沢筋づたいを、一日かけて歩く覚悟で、朝早くに出発をした。

.....ところが.....

おかしいのは、予定の方向へ間違いなく進もうとすると、空気が抵抗するのである。

子供のころから護身の術として鍛錬してきた気功拳法や合気道など東洋系の武道には、〈遠当て〉と呼ばれる PK（念力）まがいの技がある。気合いの力で相手を遠くへ吹き飛ばす、一種の超能力なのだが。

それを仕掛けられた時の感触に似ていると言えない事もない。ただし時間の感覚が、永遠に近くスローになっているのだが。

目には見えない力が、自分を押している。

SF でいう障壁（バリアー）か、マンガで見かける「結界」とか言うやつか。

そんなものが果たして実在するのかと、口の端で嘲（わら）いながらも、追い返す意図があるとしか思えない透明な壁の圧力に逆らいながら、じりじりと足を進めて行くのは、けっこう困難で。

軽く日帰りの予定で来たが、これでは野宿になりかねない。予備の装具は一応あるので衣食住の心配はないものの.....、無断外泊をするのは。

留守番している妹は一人で夕飯の支度をするに違いない。心細げな三つ編みの後ろ姿が、目の裏にちらちら浮かび。

ただでさえ険しい眉をさらにしかめて、しばらく考える。

先日とうとう五人目の住み込み家政婦を、わずか十日で叩き出してしまった。

結果として、家事いっさいを小学生の妹に押しつけて不自由をさせているのは、人間の好き嫌いが異常に激しい自分の責任だという、認識だけはある。

そうかといって諦めて、負けて帰るのもプライドが許さない。

午後もかなりまわって、なお目的地は遠く。

そろそろ選択を迫られている時に、斜め前方の、さほど遠くない辺りで、不吉で怪しい笛のような、かんだかい音色が響いた。

警護衆（しめごし）の鳴らす笛〈世迷琴〉による効果音だとは、もちろん知るよしもない。

.....血も凍る.....

そんな言い回しが似つかわしいような、恐怖を具象化した子供の絶叫。

昼凪（なぎ）であった深く静かな森の中、いきなりの突風が、ごうっとばかりに吹き過ぎた。

ひとかかえもある太い幹が揺れ、はでな音をたてて枯れ枝が地に墜ちる。

何か ..... 不穏な騒ぎが起こった。

逃げるか .....、立ち向かうか？

判断に迷うが、これこそが “秘密” の手がかりかも知れないと気がつけば、ここで引くわけには行かない。

尋常でなく抵抗の激しい潅木（かんぼく）の薮をかきのけ押し分けながら、腹が立つほどの進み難さに、そろそろ気力も尽き果てようかという頃。

渦をまく、奇妙な風の柱の中心に、まるで守られるかのように小さく崩折れている.....見知った姿があった。

「.....磯原ァー.....?!」

意外な場所での遭遇に、思わず語尻が上がった。

なぜこんな所で昼寝をしていると素朴な疑問を尋ねようにも、この顔色の悪さでは、まともな会話は望めまい。

「……、広兄（ひろにぃ）……？」

「あ？」

ゆり起こすと、寝ぼけて誰と間違えたのか、ひどく安心して泣きそうな顔をした。

細い腕のくせに子供特有の見境いのない力で、いきなりしがみついて来て。

「うぁー……、良かったぁ！　今ねぇ、変なユメみてねぇっ！」

「おい……、正気か？」

「……あれ？……杉谷……？」

目が醒めたのか、幾度かぱちぱちと瞬きをしていたが。

見知った顔を認めて気が抜けたという素直な感想は、同じだったらしい。

再び好一の腕のなかに崩れ落ちると、ぱったり完全に気を失ってしまった。

自分にも危険が迫っているかも知れない現状を理性で分析すれば足手まといは放って行きたいところだが。

まだ利用価値もある以上、捨てて立ち去るわけにも行かない.....と、自分を納得させて。

好一の筋力から言えばさして重いわけでもない（二歳下の妹より軽い！）のを、バックパックの上から斜めに担ぎ上げ、どちらに向かうか、迷った。

見えない邪魔をはねのけてまで、人ひとり抱えた条件で、目的地まで歩けるか？

試しとばかりに二歩、三歩と、足を運んでみる。

.....ところが.....。

進む方向も地面の傾斜も変わっていないはずなのに、つい先刻までの激しい抵抗が、何故かまったく無くなっていたのである。

むしろ誰かに呼ばれているような、“気を引く”感触さえある。あげくのはてには背中を押して、弱い風まで吹いて来て.....、

そしてそれはおそらくは、自分に語りかけているわけではなくて。

「.....おまえ.....、か.....？」

眠る子供を振り向いてみても、ただ苦しげに眉根を寄せて、気を失っているばかり。

根拠のない確信の由来が自分でわからずに、額の汗をぐいと好一は拭（ぬぐ）った。

『　ありえる・たうん　第四話・5　』　（@ 96.08.24）

http://76519.diarynote.jp/200609141107310000/

2006 年 9 月 13 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3

☆

その滝は奇妙なことに山腹の岩盤から忽然と溢れ出しており、それより先の地表には、まったく流露がない。

世人や観光業者が知れば間違いなく新名所として資源にされるであろう、幽玄な構えの奇観だが。

いわゆる伏流水の湧出口が褶曲と摩耗によって断崖の中途に開けているだけなのだろう。

滝口の上下で地層の質が異なっているのが、視力の良い好一には崖の下からでも、はっきり見てとれた。

《山殿様》（やまんまさぁ）と呼ばれる神社は滝の噴出口のすぐ横手、崖の中途のわずかに傾斜のゆるい箇所に、山腹に半ば食い込む形で天然石の土台を据えて、むりやり建て上げたものだ。

いぶした銀の色合いに深く古錆びた木造建築は、造られただろう年代を考えあわせれば、大した技術力だと言える。

失神したまま深い睡りに陥ったのか、肩口にかかる熱い息のまま。

ピクリとも動かない清を背負った好一が、その聖域にたどりついたのは、すでに八月の陽ざしが山脈の西に隠れる刻限だった。

「やぁでやぁで、

磯原ん末子（しめご）な来（ら）いでゃ、

出た子ぉ、来（ら）したかぃ？

月神（つっかむ）さぁな決みゆ事（うら）は、

儂（し）ぃなぁ判（はん）ぜんわぁー」

あきれたような嘆息を吐きながら出迎えに現れた初老の男は、郷土史資料館長。つまり次期（つい）の翁様（おきさぁ）と呼ばれる人物でもあるのだが、あいにく好一にはそうした知識はない。

「可愛（おおし）い末子（しめご）ぉ。気ん毒らぃたぁやぁい」

どこか品格を感じさせる和服姿の老女が、小者をしたがえて走りよって来て、清の手当てをしようからと、身ぶりで差し招く。

やはり好一は相手を知らないが、信用しても良さそうだと、ぐったりした子供を預けて任せてから、あらためて老人に対した。

「.....つまり、オレは自力で辿り着いたと、認められたと言うことか？」

「諾（なぁ）や.....。じきと月さぁ昇らすで、来（ら）いやぁ」

導かれて崖のはざまの隠し道を通り、しばらく後にたどりついたのは、滝の噴出口のす

ぐ脇に開かれている深い洞窟への入り口だった。

そこにたたずむ白髪の老爺の姿を認めると、初老の男はうやうやしく頭を下げて、来た道を引き返していく。

「良（あぁ）な来（ら）ぃやぁ。
儂（しぃ）な、警護衆（しめごし）な長老（おき）なや」

.....ずいぶん大きくなったなだの、赤ん坊の頃に一度会ってはいるが覚えていないだろうな.....、だの。

同じ野者で〈八十一家〉どうしである以上、なんらかの形で遠縁にあたる老人から、月並みな挨拶を並べられ。

少年は、“それがどうした” という顔で、本題に移るのを憮然と待つばかり、相づちを打つことさえしない。

聞きしにまさる愛想のなさに、しかし年の功をつんだ人物は動じもせず。

にしゃりと笑って止（とど）めの話題をと続けた。

「儂（しぃ）ん孫（みや）な、
お前（あれ）ん襁褓（むつき）な替（ま）えやぁ言ぅで、
懐かしゃまったぃ、顔見やしゃあ」

「.....ムツキ？」

見当のつかない単語をしかたなく尋ねかえすと、

「あーな。今（え）ん言葉な、何（みゃあ）だ言（ま）うやら.....。
使い捨てなま、〈パンパンツー〉ならや？」

なおも要領を得ない好一に、

「嬰児（みやご）ん、オシメなやぃ」

しゃらりと言い足した老爺はとうぜん、若い者らが最も嫌がる話題だと、知っているのであった。

「〜〜〜っっ!?」

ほの暗い黄昏どきの明かりでもそれと分かるぐらいには、少年の白い頬のうえに、血の色が薄く上がった。

五歳以降、十二歳の半ばまでをアメリカの西海岸で暮らした好一にとっては、すでに米語が母語である。

日本製の映画やアニメを原語で見るのは好きだったし、家庭教師を雇ってもいた。いつか父親の事業を継ぐかも知れないその時に、日系ビジネスマンとして不自由しない程度には、東京弁である標準語についての正規の教育を、きちんと受けてはいたが。

ほんの幼児の頃だけしか住んでいなかった善野のなまりなど、すでにほとんど解らない。特に老人世代の言葉はだ。

判らない言葉をむりやり理解しようとして必死でヒアリングをしている時に、下らん話題で時間を無駄につぶされて。

しかも揶揄（やゆ）されただけであったとは.....、本人にしてみれば拷問に等しい苦痛である。

『.....こんの、クソじじいっ！』

思わず米語で毒づいたのは、ごく正直な心情であると言うべきか、もちろんどうせ相手には解らないだろうと嵩（たか）をくくっているからでもある。

通じなくても悪態だという事実ぐらいは、語感で判断できるだろうが。

『.....おお。こりゃぁー、失礼しぃたのぅー？』

いかにも日本人に特有の、語尾に余計な母音が付け加わっている発音とは、言え。

ごく正確な商用英語（スノッブ）で返されて、不覚にも顎が下がった。

ふてぶてしさも目に余るような子供の裏をかいて驚いた顔をさせられたのが、嬉しかったのか。

『わしはロシア語も話せるぞぃ、戦争の後で四年ほど、俘虜になっとったからなぁー』

歯のない口でカッカと笑って、翁は得意そうに続けた。

『語学も自在にできんようで善野の護（もり）が務まるかい。.....自分と自分の親だけが、日本人では例外の天才だとでも、思っておったのか？』

実のところ思っていた好一では、あった。

『.....さて、月も昇ったのぅ.....』

木の間ごしに差しこめて来た満月の、金の鏡面に目をやって、表情を引きしめた。

『約定通り、自力でこの滝口に辿りついた者には、誰であれ全てを伝える.....、それが善野のならわしじゃ。儂らがそいつを信用しておるかどうかは問題ではない。歴史の流れというものは、人間に解せる事よりも、もっと複雑なものだからと言うのが、月神様とのお約束』

ゆっくりと、滝口脇の洞窟に向かいながら、老人は言い足した。

『信用なんぞ別にしてくれなくてもいいぜ。どうせオレは裏切り者の息子で、ガキのくせに人殺しだ』

.....本人は、知るまい。

誰からも愛される人間になるようにと “好一” の名前をさずけた一族の長老は、口もとの皺（しわ）だけを苦くたたんで、しかし何も言葉に換えはしなかった。

『　ありえる・たうん　第四話・6　』　（@ 96.08.24）

http://76519.diarynote.jp/200609141120000000/

2006 年 9 月 14 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3

☆

耳を聾する滝の音さえもが遠くにこもるような、洞窟の奥深く。

どんづまりは十畳ばかりの窟屋（いわや）になっていて、その、突き当たり。

たとえば高層ビルにいて、明かりを落とした暗い室内から足下の緑地を俯瞰すれば、こんな角度になるだろう。

かなりの上空から見おろす形で、緩やかな起伏の草原が、一面に広がっている。

正面のなかばを占める小高い丘の上には、緑の森に抱かれるような、白い城.....距離と縮尺を考え合わせれば、都邑と呼んでもさしつかえのない壮大な規模かも知れない。

ほの白く浮かびあがる窓のような光景に、訪問者はしばらく息を呑んで、魅いられてしまった。

『.....、立体映像（3D）か？』

現代人の反応としてはごくまっとうな言葉を使った好一は、しかし無言で差し出された双眼鏡に目を当てて、自分で焦点を合わせて疑い深く観察しなおすに及んで、それが現実の光景なのだと了解するしか、なかった。

白く輝く城のまわりには色とりどりの衣装をつけた人々が、賑やかに往来し。

街道には牛や馬やが荷車を曳き、満載の商品を運ぶ旅人たちに向けて道ばたで露店を広げる物売りの姿もある。

その両脇に広漠と開けた金緑は、実りかけの麦の畑だろう。草の原が風にざわめき、海の波頭のように揺れて騒いでいる。

野道に咲き乱れるのは鮮やかなキスゲ色の花穂。

それを手にした子供たちが、二重のいびつな円を描いて、遊び、舞っている。

あげく一陣の風が吹きこんできて、それはこちら側では、かなり涼しく感じられる。春の風のようで.....。

子供らが唄っている耳慣れない遊び歌の旋律さえ、微かに運んで来るではないか。

『.....なんだ.....』

聞き苦しく喉にからむ声が自分のものだと理解して、好一は、プライドだけで無理矢理に、はじけた理性を引きずり戻した。

『なんだ、これは。この穴はっ?!』

『.....これが儂（しぃ）ら野者（のもん）の一番の秘密、

善野間道（おおの・はざまみち）。』

ごく淡々と告げたのは、異界からの薄明かりに照らされて神秘な光をまといつかせた、善野の大道をまもる老翁の姿であった。

『今ふうに呼ぶのであれば異次元トンネルとか言う。
まぁ、奇想譚（ふぁんたじぃ）だの空想科学小説だの、
映画にでも出て来るような仕掛け道具に過ぎないのじゃが.....』

☆

はるか昔むかし。

たくさんの界に生まれ育った、人間とは違うたくさんの生き物たちが、幾つかの言葉をあやつって、それぞれの文化や武力を誇り、行き来し、競いあっていた頃。

仲違いをしていた二つの界のあいだで、道ならぬ恋をとがめられた翼の民と鱗の民が、界を仕切る通廊を抜けて駆け落ちし、当時、まだその頃は〈野蛮〉（そとあら）と呼ばれていたこの世界に、流れ落ちのびて来た。

後の時代に彼らを神となし、風生（はらむ）神様（かぁさ）と流戻（ながる）神様（かぁさ）と、野者は今でも呼び奉（たてまつ）る。

その二人から生まれた娘である白鳥姫が、土地の人族と交わってなした子孫が、善野の主筋の源（もと）であるとも、言い。

白翼と金鱗の両界からもたらされた知恵を授かり、言葉と技術を得て、粗荒（そあら）な暮らしから抜け出したのが、〈九上家〉（このかみや）とその血縁（ちながる）の〈八十一家〉（やそかみや）の、受けた御恩であるとも言う。

もともと野者は文字を持たず、多くは口伝であったので、数千数万にも及ぶと言われる長い歳月のなか、今では事の真相はどうであったのか、知るすべとてないが。

ただ、善野はその昔には、とりたてて特別な土地ではありもしなかったと。なぜか外荒の世界では忘れられ、失われていっただけの、不変の物語なのだと.....。

神々様やら間来者（はざまくもの）たちの、来しかた・ならわしを伝える時には、野者はしつこいほどに念を入れ、子供たちに教える。

☆

行き来していたのも、いま眼前にある《誰（ダィ）レム・アース
夢明日》一国ではなく、さらに多岐にわたるという界の大海で。

〈原場〉（はるばる）は、言うなれば廃線になったターミナル駅の「駅前商店街」の跡地であろうなと、卑近な例を選んだ翁は笑って言い足した。

もとはといえば〈謎な辻〉のすぐそばに、界道口は円を描いて点在したものを、歳月による地形の侵食と地震の断層とがそれらを引き離し、あるいは崩壊させて。

現在のように離れた場所に、ただ通廊ひとつを残すのみとなった。

これだけ段差が開いてしまうと向こうの世界の住人からも、通路の在処は忘れられ。

まれに空を飛ぶ生き物が迷いこんで来る以外には、絶えて行き来がなくなってしまった。

子供らが冒険に行って戻れないようでは困るし、駆け落ちや夜逃げに利用する者は出るしで、江戸時代の初めの頃に一族協議の上で、封印して神域となしたが。

もともと戦国の前までは、善野の中では秘密でも何でもない、故郷のあたりまえの風景だったのだ.....。

『.....戦国.....？』

いまひとつ出身地域の歴史に疎（うと）い好一は、その年代と事象についての記憶をどうにか思い出し。

『それ以降は、なんで秘密になったんだ？』

なかば理解できた気もする質問を、あえて口にしてみた。

『.....領土、という考え方が強くなってきたからじゃろうな。それに対する所有や支配の欲のせい、とも言えるが』

翁の答は簡潔だった。

『儂らなら、この土地だけでも十分に満足しながら暮らして行かれるが、外荒者はそうではない。自分が住むには余るばかりの領土を広げつくして、なおも他人の住む土地を、際限もなく必要とする.....。

目の前の、こんなみごとな景色のなかへ、長鉄砲（たねがしま）だの大陸間弾道弾（ICBM）だのを送り込んでみたいとは、誰も思わなかったのでな』

たしかに.....と、うなずくよりはないが。

では.....。

『もう一つ、尋きたい。親父.....オレの父親.....は、これのことを知っているのか？』

『この光景の美しさを知らず、息子であるお前さんにも見せてやりたいと思ったので無ければ、なんだってここに今、お前さんがいるんだろうな？』

ホッホッと低く翁の笑う声が、窟屋の壁に響いた。

『.....さて、遅くなった。お前さんはともかく、磯原の末っ子は今日のうちに送り帰さねばならんだろうしな。

.....ほかの秘密は、おいおい沢木の双子にでも、教えて貰えば良かろう？』

思わぬところで担任の名前を出された不良学生は、しばらくのあいだ返答に窮してしまった。

☆

なかば呆然としたまま辞去すると、滝脇の参集殿で手当を受けて冷たい飲物まで振る舞われたらしい清が、すっかり快復して好一を待っていた。

当然のように同級生に家まで送らせるつもりでいる老婦人に、これ以上なんの義理があるのかと、かなり不満も覚えたが。

「お手数かけますぅ.....」

と、頭を下げる当人は結構しおらしいので捨てて行くわけにもいかず。

夜目も利かないらしくヨタヨタと危なっかしく歩くのを待つよりは早いかと、仕方なく再び背負った。

.....と。

「ねーねーねー、中で何を見てきたのか、教えてよーっ！」

野者が参拝に使うと言う、きちんと整備された内密のルートを教えられて麓までの道のりを急ぐあいだ。千一夜物語（アラビアン・ナイト）に登場する石の老人よろしく背後妖怪と化して、まぁしつこいことだ、こいつは。

あまりうるさいので無視する努力も途中で根負けして、

「あの女は、おまえに何て言ったんだ？」

尋ねかえすと、“自力でたどり着けなかった者には知る権利はない”と、すでに媼様からはクギを刺されていた清は、一瞬ウッと詰まったが。

本人はさりげなく話をそらしたつもりで、

「金銀財宝が埋まっているでなし、知ったところで何の得にもならないが、知らないでいるよりは人生が何倍も楽しくなるというだけのもの」.....だと言っていたと説明し。

「それだったら、知ってたほうが絶対に良いじゃんねぇっ!?」

声高な主張に対して唸るように苦笑しながら、

「.....そいつの言うことは、正しいかもしれん.....」

だいたいが、言ってもどうせ信じないぞ.....、と。

本心そう思っていたので最後まで断り続け、見聞きしたことの真相を、好一が清に明かすことは、ついになかった。

「オレだって、この目で見なければ絶対に信用しないだろうしな」

聞き出す努力をとうとう諦めて、退屈なのか世間話を始めたが、相づちさえロクに打たない好一のつきあいの悪さにそのうち呆れたものか。

あいかわらず熱い体のままの子供は、いつのまにやらすっかり熟睡していた。

『　ありえる・たうん　第四話・7　』　（@ 96.08.24）

http://76519.diarynote.jp/200609210750080000/

2006 年 9 月 15 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3

☆

晧（こう）として輝く銀盤が、沖天の高みにある。

二時間ばかり足場の悪い杣道を下り通して、バイクを隠してあった山裾の狩小屋まで戻り。

市街地にたどりついた頃には時刻はだいぶん更けていて、海抜の高い盆地の晩夏、夜半の風には涼秋の趣（おもむき）がしのびこんでいた。

一度覚えた情報は決して忘れない記憶力の持ち主である好一は、何回か送って来たことのある門前について清を揺り起こそうとしたが、目を覚ます気配もない。

諦めて、前庭の夏木立ちに隠されて表の道からは隔たっている、玄関口まで入った。

季節に合わせて取り替えたらしい夏向きの青い引き綱に、「御用のあるかたは、この紐を引いて下さい」と、丁寧な手書きの木札が下げられていて。

その通りにするとドアの内側でかなり大きな呼び鈴の音が、華麗なリズムを奏でる。

「遅いぞ、どこへ行ってた……、清っ!?」

誰何（すいか）もせずにいきなりドアを開けた不用心な若い男は、訪問者の顔よりも先に、背負われた弟の姿を見分けたようだった。

「……発作を？」

駆けよって来て抱き取ろうとしながら心持ち青ざめて尋ねる。それに背中を向けて協力してやりながら、そう言えば何かの病気持ちだったかと気がついた好一が、

「知らんが、一応手当は受けてた筈だ」

短く説明しても、なおも不安そうな顔をしている。

「疲れて眠ってるだけだろう。さっきまでは、起きて喋ってた」

仕方なしに言葉を探して、つけ加えると、

「そうか……。すまん、助かった」

あからさまにホッとした顔で深く礼を言い。

「えーと……、きみは？」

玄関燈の薄明かりでもわかる日本人らしからぬ白い肌色に、あらためて首をかしげた。

「杉谷好一」

いちおう名乗ってみると市内での悪評のほうは知っているのかどうか。

末弟によく似た笑みであっさり破顔して、

「いつも世話になってるそうで……、俺はこいつの長兄で、広ってんだ」と、続けた。

「広（ヒロ）、どなたかいらしたの？ 清（キヨ）が帰って来たんじゃないの？」

家の奥から少し不安げながらも落ちついた声がして、金褐色の巻き毛を後ろでたばねた濃色の肌の女性が、足早にやって来る。

「清だよ、本人寝てる。送って貰ったそうだ」

すでに面識だけはあった磯原夫人は好一の顔を認めると、「あ」と、白い歯を見せた。

「まぁまぁ.....、いつも本当にありがとう。ご迷惑をかけてしまって、ごめんなさいね。あがってお茶でも飲んで行ってくれません？」

言ってから、「あ、お夕飯は召し上がったのかしら？」と。

まだと答えればすぐにでも夜食を用意しかねない調子で、熱意をこめてつけ加えた。

清が自分のことをどう家族に伝えているのかなど、もちろん好一は知らない。

知らないが、まるで純粋な好意でもって迎えられている気さえする、慣れない反応に。

不意に自分でも説明できないような強い苛立ちに襲われた。

「いや.....。妹を待たせてるので、帰る」

しかめた眉のあいだを、ますますギュッと寄せて応えると、

「へぇ、妹さんがいるのか？ そうか。」

なにが嬉しいのか一層破顔した。

「えーとじゃあ、甘いもの、平気か？ 嫌い？ でも妹さんは食べるよな？ 今、ケーキが焼けたところで.....」

「ああ、そうよねぇ！ ちょっと待っていて下さいな。すぐに切って来ますからね」

「.....っ！」

固く断って去ろうとするのを強引に押しとどめ、むりやりにでも手土産を持たせようと勝手に話をつづける家族に、痺れを切らしたものか。

「あれ.....っ、おーいっ!?」

焼き菓子を詰めた小さからぬ箱を手にして広が玄関へ戻ってみると、背の高い少年は無言のまま、くるりと背を向けて門の向こうへと歩き出してしまっていた。

呼びとめても、振り向く気配さえない。

「.....とことん愛想のないやつだなぁ.....」

もしかして、人見知りの激しい同士なところが気が合った理由なのだろうかと。

末弟との意外な共通点を見いだして、母と広は苦笑して。

せめて角を曲がるのを見送ってから、後ろ姿に頭を下げて、しかたなく門柱の燈火を落とした。

☆

翌朝。

前日の無謀な行為の顛末を、あらいざらい（しかし〈禁突破〉（きんやうでぃ）についてのくだりは野者との秘密であるので、うまく除いて）報告させられて、清は家族一同から、たっぷり説教をくらった。

きれいにラッピングしなおした手作りケーキの箱を母親から持たされて、くれぐれも、ちゃんと礼を言うようにと、広からも厳しく念を押され。

つきあいのあるのは内緒にする約束なので人に尋ねるわけにも行かなくて、クラス名簿と市内地図をもとに、さんざん迷ったあげくに杉谷好一の家を探しあて、門のチャイムを押した。

「こんにちわぁーっ」

厳めしい忍びがえしのある高い塀は、しかしほどよく古びた赤い煉瓦が緑の蔦に覆われていて、すかし文様の華麗な門扉には磨きこまれた古い飾り錠前がかけてある。

ややあって、

「はぁーい。ドナぁータデス、かー？」

かなりカタコトな日本語でもって元気よく応対にあらわれたのは、杉谷好一が秘蔵する（とは、いまだ清は知らないが）、たいそう愛らしい笑顔の妹で.....。

帰宅後、その美少女を誉めちぎる話ばかりで夕飯の席を独占した末弟は、その後、

「雪女のお姫さまはどうしたんだ、こぉーの浮気モノっ?!」

と、電話線の向こうの次兄から、あきれられる次第となった。

そうかーお前は面喰いだったんだなぁとばかり、広も笑いながら小づいてみたりする。

幸いなことに磯原夫人の手製のケーキはユミコの味覚にぴったりだったらしい。

かわいい大事な妹に、人畜無害なボランティアの日本語教師と一緒に家庭料理の先生までを、労せずして手に入れられた、運の強い好一は。

通いつめてくる清がなんだかんだと自分にもジャレついて来るのを片手間にあしらいながら、してやったりと内心ほくそ笑んでいた。

自分から利用されたいと寄ってくるようなお人善しなら、ていよくコキ使うこちらとしても、なけなしの良心が痛まないではないか.....。

☆

.....まるで似たところなどないと、本人同士は思っている二人が、お互いを貴重な友人だと認め合うようになるのは、まだ少し先の話で。

そのようにして善野には、また新しい物語が生まれてくるのである.....。

奥付

奥付

リステラス星圏史略

古資料ファイル

5-2-1-4

『 Never Ending Streets 』

../../book/109566

著者：霧樹里守 is 土岐真扉
著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
../../book/109566

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/109566

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ

リステラス星圏史略　古資料ファイル　5-2-1-4　『 Never Ending Streets 』

著　　霧樹 里守（きりぎ・りす）

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社